再びカルチャーショックの八ヶ岳阿弥陀岳北陵　山行報告

（山域）　八ヶ岳

（コース）　赤岳鉱泉から阿弥陀岳北陵

（日時）　2 月 25 日(土)、26 日(日)

（天候）　快晴

（参加者）　CL 西岡、SL 土屋(記録)、佐藤(記録)、宮城、大木・室(会計)

（山行タイム）

25 日　美濃戸口 12：00－12：45 美濃戸 13：05－14：00 堰堤広場 14：15－15：10 赤岳鉱泉

26 日　赤岳鉱泉 07：25－07：55 行者小屋－08：20 阿弥陀分岐－11：10 阿弥陀岳山頂－中岳のコル－13：00 行者小屋－13：25 赤岳鉱泉（お茶休憩）14：30－16：00 美濃戸口

冬の八ヶ岳は、私の冬山登山の概念を変えてきている。

昨年の 3 月に続いて、今回は 2 月の厳冬期に入山、昨年の 3 月は山ガール（老いも若きも）がファション豊かに、小さいザックを背に八ヶ岳を歩き回っていたのを記憶している。

昨年は美濃戸口から赤岳山荘までの道のりを、多くの登山者を尻目にしながら、車の中で揺られながら行った。

しかし今年は、美濃戸口は、車　車の大混雑、駐車場はすでに満車、期待した美濃戸～赤岳山荘間の車の走行は、入口で路面凍結の為、侵入禁止、これでこの間は徒歩（これが本来の姿　期待するのが不純）

ふうーふう言いながらの青息吐息で辿り着いた赤岳鉱泉は、人、人であふれている、受付の従業員（バイト）に、いつもこんなに混雑しているんですかと聞くと、「ええ、ここは夏より冬の方が混雑しています」　スキー場であるならば理解出来るが、ここは山の世界。あの穂高でさえ、冬となると静寂さを取り戻す、八ケ岳は大混雑だ、昨年の 3 月には、山ガールが多数を占めていたが、2 月となると少数となっているのが違っていた（我がパーティーは山ガールが半数）

6 人部屋の部屋に案内されて、ドアを開けてみると、ビックリ仰天、大広間の中に、ベツトが 4、フトン 2 組が並べてある（ここは山小屋なのか、ホテルなのか）私の記憶にはフトン 1 枚に 2～3 人が山小屋であった、さすがに我が山ガールも、これには唖然としていた。

夕食まで 2 時間待ち、さっそくビールとワインで酒盛り、最後の夕食のメニューは、ステーキ、これにもビックリ、酔いにまかせて、腹の中に流し込んで、満腹状態でフトンの中に潜りこんで夢の中へ、冬山の原則は、食べること、山小屋のホテルもこの原則は堅持。

26 日　早朝とはいかなかつたが、7：15 に小屋を出て、目的地阿弥陀岳北陵、すでに数パーティーが取り付いているのが見える。

今回のザイルパートナーの組み合わせは 1　西岡・室　2 佐藤・宮城　3 土屋・大木

しばらく雪面を登って、3 級位の岩場が核心部、アイゼンの爪を岩にひっかけて、グイグイと攀じ登る、少しアイスバーン状の所では、手掛かりが少なくバランスを要求される。慎重さと大胆さをもって 1 歩

ずつ上へ、上へと体を引き上げて行く、核心部を通過して、ビレー地点で確保、ここを女性の宮城さんがトップで攀って来た（佐藤・宮城さんはマッターホルンの経験者）余裕の登攀だ、楽しんでいる。

最後のナイフリッジから、山頂へ、早速パンで昼食、下山はコルまでの急斜面をコンテナで進み安全地帯のコルでビレー解除、ここからは遊びながら山小屋へ（足はヘロヘロ）

山小屋では中に入って、コーヒータイム（ヨーロッパアルプス並の気分か？）

赤岳鉱泉から駐車場まで、駆け足のように足を運ぶ（時間がない）下山途中の赤岳山荘で休憩していると、ニコニコ顔の登山者が近づいてくる、どこかに記憶のある顔だ、そうだ倉ちゃんだ（倉田）、彼とは 5 月穂高の北尾根、5 月の剣の八峰、2000 年の年末年始の奥穂高に共に登っている、17 年ぶりの再会だ、彼がちば山の中核になるかなと思っていたら、彼はアフリカにボランテアに飛んで行った。今日は八ヶ岳へ日帰りのピストンとかで足早に去って行った。

下山途中の多くのすれ違う登山者の中に、大きなザックを背にした若者を見ていると何故か嬉しくなってきた（もう我々には無理であるが）これが本来の姿なんだと思うのは悪あがきなのか？時代は変って行く、山は若者から中高年が主流となり、便利で快適な山へと変化している、そんな事を考えさせられる山でありました。

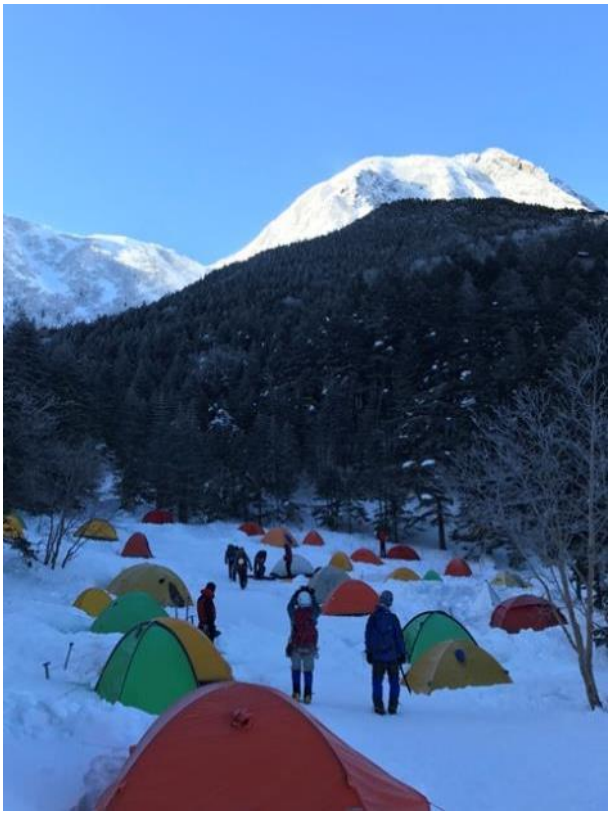
青空の中美濃戸口からの快適な歩き

赤岳鉱泉のアイスキャンディー

個室「横岳」からの展望

土屋さんのカルチャーショックなお部屋

翌朝、中山乗越からの大同心・小同心



行者小屋から阿弥陀岳

北陵に向かう

最初の岩場、核心部

阿弥陀岳山頂から富士山

阿弥陀岳からの急な下り、正面は中岳・赤岳